

# 船幽霊が語られるとき

川島秀一（東北大学災害科学国際研究所）

キーワード 船幽霊、カシキ、オフナマダ、海難、世界

「船幽霊」という世間話は、とくに漁村でモーレンセン（亡霊船）とか、ボウコンセン（亡魂船）と呼ばれるもので、ほんやりした明かりだけのものもあるが、基本的に船の形をした幽霊で、海上で見える怪異の一つであり、海難者の霊だと語られている。

船幽霊の出現時は季節や天候を選ばず、春先の霧のかかった時分や雨の降る夜、雪が降って四方が真っ白に見えるときなどに現れることが多いが、風の強い日もある。元日や盆の15日などの船を出してはいけない日に沖へ行ったために出くわしたという例も多い。全国的によく語られる話の型は、船幽霊が現れるとヒシヤクを貸せと願われるが、そのまま貸すとそれを貸して水船にされるので、必ずヒシヤクの底を抜いて貸すものだという話である。これらの船幽霊の話が実際にどのような機会を捉えて話されるのか、漁業という生活のなかから考えてみたい。

宮城県気仙沼市唐桑町小長根の佐々木利男さん（大正7年生まれ）は、少年の頃、カツオ船のカシキ（炊事係）を勤めていたときに、一緒に乗船していたトモ（船尾）のオヤンツアマから、「沖でボウコン（亡魂）に遭ったとき、もしボウコンからツルベ（釣瓶・図1）を貸せと言われたら、底を抜いて貸すものだ。エナガ（柄杓・図2）を貸せと言われたら、カエツチャ（逆さ）にして貸してやれよ」と教えられたものだという。カシキは他の船乗りが起きない前に米をといだり、茶碗を洗ったりするが、そのように一人でいるときにボウコンや不審な漁火が見えることがあるという。しかも、ツルベやエナガは、カシキがよく使用する道具であり、これら



図1 ツルベ（今はバケツを用いる）

の道具を用いて、ボウコンなどが船に水を入れたりすることを、漁師たちが非常に恐れたのである。そのために、カシキは神妙な面持ちで甲板の上に膝を付き、オヤンツアマから船幽霊の話聞いたのである。

カツオ船のオヤンツアマとは、役職名であり、トモ（船尾）にいて、カシキなどの初めてカツオ船に乗った14、15歳の少年に、カツオ漁の技術というよりは、海や漁に対する心構えを指導する年配者であり、多くは船頭（漁労長）経験を終えた者たちである。彼らは、カシキに単なる具体的な教訓を与えるというだけでなく、逆に恐怖心を植え付け、それを克服していく冷静な心を養うことにも心がけてきたものと思われる。一人前の漁師になるには、夜の海に対する恐怖心を拭い去っていくことが必要だからである。

このオヤンツアマとカシキとの関わりを由は、カシキは朝・昼夜と日に三度、船のオフナマダという神様にも、ご飯を上げているからだという。

カシキだけが夜の海や仲間の子の異常を感じることができたのだが、大島の遭難の話でも、オヤンツアマと、一人助かったカシキだけが、仲間の異常を知っていたわけである。他界に行こうとする老人と、他界から出てきたばかりの子どもには、他界の情報も感得できる力があると思われるものだろう。このような力を養成するためにも、オヤンツアマはカシキに、船幽霊などの他界の物の怪が関わる話を伝えようとしたのである。どちらかというと、廻船やカツオ船などの沖船で船幽霊が伝えられることが多いのも、より人知の及ばぬ他界に近いところを操船しているからである。

考えさせるような、もう一つの船幽霊の話がある。この場合は、船幽霊を見たとか出会ったという話ではなく、「ボウコンに船が憑かれた」と語られる噂話になった事実である。気仙沼市浅根の村上吉一さん（大正4年生まれ）によると、明治の頃、大島（気仙沼市）にいた15歳の少年（カシキ）が冬の鰯船に乗り組み、海難に遭遇し、ただ一人だけ助かったときの話である。吹雪のなか、大島の出港地の入り口まで戻ってきたものの、突然、乗組員全員がボウコンに憑かれ、船を押すのを止めて、海から水を船の中に汲み始めたという。一人だけ冷静だったのが舵をとるオヤンツアマで、蓑を着た少年を懐に抱きながら死んでいったという。その子だけが生き残って、この話を伝えたものと思われる。



図2 エナガ（柄杓）

ところで、船幽霊の話にツルベ・エナガ・アカカイなどの、海水を汲む容器の漁具が出てくるのは何故だろうか。柳田国男は「杓子・柄杓及び瓢箪」（1919）のなかで、船幽霊の対処方法の例として、「尾州（愛知県）知多郡の海上などでは「あやかし」（船幽霊）を鎮めるには柄杓を多く投ずればよいと言ふ話はあつて、別に其杓の底を抜くとは見えぬ」と述べ、本来は柄杓を供するのは「魂の宿り」であつたと述べている。つまり、船幽霊の魂を柄杓の中に閉じ込めるために海に投じたのが本来のねらいであつたという。宮城県の気仙沼地方で、逆にアカカイのいない船には乗るなど言われているのも、それがアカカイを求めると幽霊船であるというのではなく、その漁具を持つことが船幽霊に遭遇したときなどに役立つからであつたと思われる。

それが、死者が真水を求めて飲むための道具として柄杓が考えられ、ひいては、アカカイを出すはずのアカカイが、異常な心理状況のなかでは、それで海水を船に汲み入れたらするという経験譚が加えられ、そのような水を入れる容器である柄杓やアカカイやツルベなどを船幽霊から求められたときには、底を抜いて渡すということが語られ始めたものと思われる。

いずれにせよ、「船幽霊」の話は単なる民話でも教訓話でもない。それは、漁業という海に向かわざるを得なかった生業の中から生じた話であり、他界も含めた、人知の知ることのできない海のいのちや怖れに対して、謙虚になって感じとれる能力のもった人びとによって伝えられた話の数々であったからである。



図3 アカカイ



図4 盆月の始まりの日に団子を船から投げる（新島、2006.8.1）

の島山平作さん（明治36年生まれ）は、次のように話してくださいました。時代（暴風雨）のときは、アカカイ（船内にたまった水をかき出す漁具・図3）を用いて、船に入った水を外へ出しながら帰航したのだが、あまりの疲労に、どちらが船の中か外か分からなくなり、海水を船に入れる者があつたという。そのような者を「モーレンに憑かれた」と語り、お施餓鬼に上げた団子をかませ、海に吐き出させると正気に戻ったという。このような仲間を観察した者たちが、モーレンには、底を抜いたアカカイを渡すものと語り始めたのかもしれないと平作さんは語る。ここで、モーレンに与えられたと思われる団子とは、海難者に与えられる供物のことである。伊豆七島の新島で、盆月が始まる8月1日に、漁船から団子を海に供えるの